

昭和初期における F. フレーベル教育の受容

酒 井 玲 子

目 次

研究の視点

- I フレーベル生誕150周年の節目
- II 後藤真造のフレーベル研究
- III 小川正行のフレーベル受容
- IV その後の業績——まとめとして——

研究の視点

明治、大正期におけるフレーベル(Friedrich W.A. Fröbel)受容の研究から、その対象や方法が時代の教育状況や課題と密接に関わっていることが明らかにされてきている⁽¹⁾。明治期は精力的にフレーベルの著書の翻訳や解説書が出版されたが、それは、フレーベルの生涯、思想、教育論の全容というよりも概ね幼稚園教育法の英米からの移入、という特徴をもっていた。

一方、大正期には児童中心の自由主義教育の思潮のもとに新教育が提唱されてくる。それは明治期の恩物の使用を中心とした硬直した教育方法を急速に変革しようとする積極的運動であったといえる。これは1924(大正15)年の「幼稚園令」の制定となって実を結んだのである。幼稚園の大衆化と幼児教育内容や方法の改善は必然的に結合せざるを得なかったのであろうと考える。

この大正期に幼稚園教育改革の先鋒を担いだ倉橋惣三の役割は、多大であったと言わなければならない。その上倉橋が明治の後半から大正期を中心にして、フレーベル受容とその実践現場への導入についても我国に於ける第一人者であったことは事実である。だが彼のフレーベル受容は、明治期にフレーベル教育方法が偏重されて導入されたのと共通して

いる。というのは倉橋によるフレーベル原典を含めての研究成果は、フレーベルの重要な、しかし、ある側面をなす教育論に片寄って着目したといわざるをえないからである。彼はフレーベルの象徴主義への批判から出発して、フレーベルの自己活動と生活尊重、家庭教育に彼の関心を専ら傾注していったのである。

この研究では上記のような明治・大正期の教育課題との関連で受容されたフレーベル教育が、昭和初期にはいかなる対象を研究、受容したかを探ることにある。この時期は、大正新教育の余韻を残す教育界に、やがてファシズムの嵐が吹き荒れ始める時期である。

フレーベル生誕150周年を節目に我国でもかつてなくフレーベルの研究が進むが、これらを明治・大正期のフレーベル受容と比較して検討したい。その際、主として後藤真造と小川正行のフレーベル研究の成果に依拠しながら考察を試みたいと思う。

I フレーベル生誕150周年の節目

昭和時代の到来とともに教育の中央集権体制化がいつそう進み、第四期国定教科書の改定と公民科の設置、教師の思想問題対策など、教化総動員の教育施策が着々と進められていった。1931（昭和6）年には満州事変の勃発、1933（昭和8）年国際連盟より脱退。京大滝川事件が起きたのもこの年である。

こうした国家主義教育の進行する昭和初期の数年間、未だ大正新教育の余韻もあり、変質しながらも各種の自由学校は存続していた。一方、生活綴方教育や郷土教育の運動が展開され、新興教育研究所、北日本国語教育連盟、児童問題研究会などの民間教育団体も結成された。この時期はこれらの団体が国家主義の教育とのはざ間でさまざまな葛藤を引き起こしていく時代でもある。

さてこうした教育動向を背景に幼児保育界は、「幼稚園令」の発令（大正15）や託児所令への運動などによって活気を帯びてくる。幼稚園数はこの10年間に二倍にも増加し、2千園にも達した。また託児所もこの間五倍近く、1500園となった。幼稚園の保育内容は昭和の初めには保育五項目（遊戯、唱歌、観察、談話、手技）の他、生活指導や体育、行事が

組まれていた。恩物についても自由な仕方で使用されているところが多かった。

しかし国際関係の変化とともに、1932（昭和7）年頃からは躰や体育、保健が重視されてきている。昭和初期の幼稚園、託児所の保育目標は以下のように概括されている。

1. 「教育勅語の御趣旨を奉載する」保育
2. 幼児の心身の健全な発達と善良な性情の滋養
3. 家庭教育を本体とし、これの補完的役割⁽²⁾

しかし、国公立の幼稚園とは異り、キリスト教幼稚園では「君が代」を唱わず、訓話では「海軍記念日」、「天長節」、「靖国神社」などに代って聖書が用いられたところもあったという。また、託児所でも朝の静かな時間にはフレーベル式恩物の使用で、「個人的な主に独創力を養ひ得る遊び⁽⁴⁾」が行われているところもあったのである。

さてこうした現場の実践家によるフレーベル受容はこの期どのように行われたのであろうか。ここでは丁度1927（昭和2）年に開園40周年を迎えた頌栄幼稚園の園長であるハウ（Annie L. Howe）に注目したい。婦人宣教師として来日した彼女は2年後の1889（明治22）年に頌栄幼稚園を創設し、園長職の傍ら頌栄保母伝習所で保育者養成に携わった。一方1906（明治39）年、超教派の幼児保育の発展を目的とした、Japan Kindergarten Union（J.K.U）を結成している。ハウはこうした実践や運動に併行してフレーベル教育学やキンダーガルテン関係の文献翻訳や著述に貢献した。なかでもフレーベルの二大著作、『母の遊戯及育児歌』（明治28）、『人之教育』（明治42）などを我国に最初に翻訳紹介した彼女の功績は基大である。その他ハウ自身がフレーベルの精神と幼児保育学を紹介した著作は十指に余り、頌栄保母伝習所では自ら訳・著のフレーベル文献の他にビューロー夫人の『フレーベル伝』（大正7、訳）を講義し、フレーベル主義保育の真髄を導入したのである。

祖国アメリカでは、フレーベル主義批判論争が進歩主義教育学や心理学の側に軍配が上る1900年代、我国にも新たなフレーベル研究の試みが倉橋惣三たちによって展開された。

ハウはアメリカでフレーベリアンのパトナム（A.H. Putnam）の保母養成校に学び、ウィギン（K.D. Wiggin）から影響をうけたフレーベル教育

法心酔の幼児保育思想家であった。しかし、1898(明治31)年の講演では「幼稚園の眞の仕事は摺紙、縫取、粘土細工や恩物の組み立てなどばかりではございません……幼稚園の第一の目的は人の品格を養成すること」である⁽⁵⁾と強調している。そのうえで、第二にフレーベル思想の基本原理の理解、第三にフレーベルの原理の実行を訴えている。しかもこの際、従来の我国の幼稚園が方法技術のみに片寄り、原理の理解が欠乏していたことをアメリカを例にとり反省を促した⁽⁶⁾。その後キリスト教主義幼稚園界で活躍している。頌栄幼稚園40周年の記念祝賀会においては、伝道機関の一事業である幼稚園の役割を40年前と比較して述べている⁽⁷⁾。さて、40周年を迎えたこのハウの頌栄幼稚園については、『幼児の教育』においてその見学記「頌栄幼稚園の二時間」が載せられている⁽⁸⁾。丁度その日はフレーベルの誕生記念日(4月21日)にあたっており、フレーベルの遊具が展示され祭典が催されていたという。

また同誌では倉橋惣三が「ハウ女史」について執筆している。彼はハウの『人之教育』について、フレーベルのこの著の研究を志す者は英独文献はハウ女史訳の恩恵によらざるを得なかった状況を記している。また幼稚園教育に関する書物で最も多く読まれたのはこの『人之教育』であるという。とすればフレーベルのこの難解と言われている書の中から彼の人間教育の全体像を把握する研究作業がこのハウの翻訳以降、大正昭和期にかけて盛んになったのもうなずける。それで倉橋がハウの名を永久に記憶⁽⁹⁾すべきと訴えるのは当然であろう。実際、ハウ訳『人之教育』(第二版大正14)が出版されたあと、このフレーベルの主著は田制佐重(昭和2)、小原国芳(昭和4)⁽¹⁰⁾らによって翻訳されたのであった。

1932(昭和7)年4月21日はフレーベル生誕150周年にあたる。これを記念して小川正行たちのフレーベル研究書が著わされた。その前の『幼児の教育』、昭和7年4月号はその記念号の性格をもった出版となった。まず巻頭文に倉橋惣三が「キンダーガルテン」を載せている。ここでは、「新計画の名称はキンダーガルテンに限る！」とフレーベルが叫んだ一コマを紹介している。

続いて倉橋は「フレーベル誕生百五十年」を執筆している。彼はここにフレーベルが、「より進歩せる教育論」や「厳密なる精密思索」としては批判指摘されるにしても、幼児との遊戯に没入没我する「子どもの友」

「教育的天才の極致」としてのフレーベル像を紹介している。その「真実絶対の価値と力とを人類の教育に与ふるに於て永遠に変わることがないであろう⁽¹¹⁾」とも述べている。

また翌月号には、「フレーベル誕生百五十年記念講演会」の様子と演者である倉橋の「フレーベルの生れた家」についての講演記録をのせている。倉橋はフレーベル生誕の地図を用い、彼の家族関係、自然との交流、沈思黙考の生活から宗教的感化を受容する15才までの少年フレーベルを紹介している。また玉成保母養成所のアルウィンの講演の記事もある。が、その内容の記録は載せていない。ただ彼女について「フ氏の精神を現代的に最もよく理解し、その最も熱心なる実験者体験者⁽¹²⁾」であり、当日は「熱烈な讃美を以て教育者フレーベル」を語ったとのみ記している。

なおこの号には「企画」と題して、フレーベルのキンダーガルテン計画とその思想を述べた一文も菊池武継訳で載せている。

II 後藤真造のフレーベル研究

(1) 『教育者としてのフレーベル研究』の位置

さて、次にフレーベルの研究著作の検討に移りたい。後藤は彼のフレーベルの著作研究の冒頭で、簇生する時代の諸新説は教育の渾沌現象であるから、真諦をなす教育論が必要であるという問題意識を述べている。彼はこの「真諦」模索過程でフレーベルの『人間の教育』に出会い、「斯道の聖典⁽¹³⁾」と称すまでに心酔する。以来10年の才月を経て1930（昭和5）年にこの書が出版されたのである。

後藤の場合、この著作においては高等女学校長という教育現場の視点⁽¹⁴⁾が彼の研究を特徴づけている。彼は当代の教育界を慨嘆して言う。「教育界に立論階級と実行階級とが互いに孤立的否主従関係にある間は教育諸説の高次の止揚、並にその実施が起きた『人間の教育』たることは望み難いといはなければならぬ」と。つまり自らの立脚点から、実践と理論（的研究）の対立を止揚しうる書として彼の目にフレーベルの『人間の教育』が映ったのである。

さて後藤の『教育者としてのフレーベル研究』であるが、独文の参考、引用文献としては、フレーベルの“Die Menschenerziehung”と“Mutter

und Kose-Lieder”のみで他は全て英文である。⁽¹⁵⁾

それらは J. ジャーヴィス (Jarvis) によってランゲ (W. Lange) 編の『フレーベル教育学全集』から翻訳された“Froebels Pedagogics of the Kindergarten”や、またブロウ (Blow) や エリオット (Eliot) による“Mottoes and Commentaries of Froebels' Mather Play”など 9 冊の英文書である。

つまり後藤のフレーベル研究の第一の特徴は、英米のフレーベル研究に依拠している点にある。

そこには明治・大正期にフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を「マザー・プレー」などと訳して呼んでいたのと共通する用語も見られる。

第二にフレーベル研究における対象の範囲と比重であるが、全三篇の構成中、第一篇の生涯や時代の教育状況は極めて少い。これは『教育者としてのフレーベル研究』(傍点筆者)と銘打つように教育に力点を置いていることにもよる。しかしまた第二篇の教育事業やその理論と実際も幼稚園の事業と教育方法がその大半を占めている。『人間の教育』を生んだカイルハウ学舎の事業の記述が極端に少いのはアメリカにおけるフレーベル受容とその文献の制約によるものと考えられる。

そして第三に言えるのは、この一篇と二篇を合わせても第三篇の量にははるかに及ばない点についてである。すなわち後藤の著作は第三篇の教育思想概論を彼の主要な研究対象とし、中でも幼児、児童教育思想家としてのフレーベル像を究明したことにある。

(2) 内容の概観

後藤の師である福島正雄はこの著作の「跡文」で、明治以来の幼稚園開設にもかかわらず、フレーベル研究において見るべき成果がないが、後藤の著作はその意味で「整美に近きもの⁽¹⁶⁾」である、と高く評価する。確かにこれはこれまでにない大部なフレーベル研究書である。次に内容について概観したい。

第一篇では幼少年期を描写しながら、「氏は温かき真の家庭教育を受けざる故に……然しフ氏のこの薄倖は彼が母性を尊び、慈母の愛を切望し、幼児を神性視し、其教育を重んじ、彼が後年の教育事業を起すに至らしめたものであるとも考えられる⁽¹⁷⁾」と指摘している。断定は避けているものの、これは極めて陥入りやすいフレーベル観ではあるまいか。フレー

ベルのマイニンゲン公宛ての書簡（自伝）で、彼が自らの生涯の初期にこだわっているのは、その孤独と悲哀の中で冥想と反省の生活を送ったこと、「生命の奮が開いた時代であり、心情の核心が芽生え、私の内部生命が初めて目覚めた⁽¹⁸⁾」ことを正しく描写したいがためなのである。児童神性観への到達までには青年期の思想遍歴や球体法則の認識の時期を待たなければならず、ましてや後年の幼児教育事業にはなお紆余曲折の教育経験を経なければならなかったのである。

フランクフルトでの教員生活とペスタロッチ訪問は生涯をかけてのフレーベルの教育目的と教授法探究の始まりであった。それは後の教育実践への先駆けであったという意味でも重要である。それにしても故郷にペスタロッチ教育法を導入しようとするフレーベルの情熱については後藤は全く叙述していないのは何故か。ルードルシュタット侯妃苑の二度の建白書は当時のペスタロッチ教育法を知る上でも貴重な資料的価値をもつものであり、そして何よりもフレーベルの捉えるペスタロッチ教育法を伺い知ることができるものなのである。

このペスタロッチ教育と第二編のカイルハウ学園時代の記述が僅少なのは、参考資料の制約によるものであろうことはすでに指摘した。しかし引き続き「幼稚園教育の方法論とその実際」の項では、「プレー論」（遊戯理論の訳）に相当の比重を置き、恩物、作業、運動プレー等を詳細に伝えている。恩物についてはここでは第10恩物まで記している。フレーベルが製作した恩物については特定できなく、第6恩物までとする説もある。ごく最近の研究では第10恩物まで確認されるようになって⁽¹⁹⁾いる。

一方、ここでは、自然物との交流、とりわけ「児童植物園」の必要が図付きで説かれている。この園庭での協同耕作が社会的市民的生活体験の場とされ、自然と人類の法則を識る場ともされている。このフレーベル理論の基調をなす庭の構想はランゲ版フレーベル著作集の中から「幼稚園における子どもたちの庭」（ジャ・ヴィス訳）に現されているものである。また「保母教員練習所」の項では養成の趣旨、目的、実際、日課、経営状況が紹介されていて大変興味深い。

次にこの著書の中心をなす第三篇の「フレーベル教育思想概論」についてだが、後藤はそれを宗教的、倫理的、哲学的、自然科学的側面からアプローチしていく。まず宗教的側面だが、ここではフレーベルが、「一

句の他の聖賢の言行⁽²⁰⁾」に頼らず、兄クリストフの理想主義的キリスト教に共鳴している点が説明されている。すなわちここではフレーベルの宗教が一宗一派に偏せず、教会教義に囚われずにイエスの言行に復帰する精神として強調されている。倫理的根拠は善なる本性を鼓舞激励し、自主的に神性を顕させることを課題としているという。

哲学的根拠としては『人間の教育』の内容から、人間、万物の中心的存在、絶対的存在として、神 (Gott) = 神性 (Göttliche) = 精神 (Geist) を置き、神によって生命の多面性、個性を統一する生命合一思想を解き明す試みをなしている。また1849年にフレーベルがハンブルグで用いたという図解⁽²¹⁾を載せ、反対物の統一の思想を明らかにしている。

総じて後藤はフレーベルの思想を「目的論的發展の法則」と名づけ、その法則は精神と実在の生物の発生史、人類の進化史に一貫したものと捉えるのである。それはダーウィンほど明確化されないが、「幾分か肉体の進化にも触れて居⁽²³⁾り、ダーウィン進化論(1859)の先駆けをなすもの」と位置づけている。後藤のようにフレーベルのうちに発生学や進化論的なものを見るのはアメリカの進化主義教育学のホール(S.Hall)やデューイ(J.Dewey) たちに共通しているといえよう。

さて、フレーベルに影響を与えた哲学思想家については、ペシエ(H. Pöschel)たちの質問に答えたフレーベルの言葉をとり上げている。それは「『我が思想はフィヒテの唯心論、ヘーゲルの弁証法に似ているがこの法則は自ら慎重に自然を考察して得たる結果であって他と関係がない。余はこれを児童に適用してその発達をなさしめるのである』⁽²⁴⁾とのフレーベルの主張である。この弁証法と精神(Geist)について後藤はフレーベルとヘーゲルの類似性を認めているが、両者の人的接触はないとみている。ヘーゲルの宇宙論は一切の事物は神的理法の発現にあり、自然物に入り自己を意識し、精神を形成するものと捉える。これをフレーベルの生命合一思想と重ねあわせてみるのはフレーベル時代の教育学者と後藤とに共通しているものである。

すでに後藤は第一篇で「フレーベルと其時代の影響について」の項目を設けている。そこではフレーベルと同時代のパスタロッツ、フィヒテ、ヘーゲル、シュリング、ヘルバルト、ショーペンハウエルの生存期間を図表で示し、「生存時代の共通なることは必ずしも彼の思想を左右したり

とは断言し難いけれども、實際上より言へば多少の影響を受けたこと明らかである。況んや直接間接これ等の人々に接触したる事実あるに於てをやである」と述べている。⁽²⁵⁾ともかくフレーベルとヘーゲルの思想は同時代の思想として改めて比較吟味する意味があるだろう。

この篇の主要な部分は幼少期の教授法と教材論である。ところでフレーベルのキンダーガルテン（幼稚園）の標語となった“Kommt, laßt uns unsern Kindern leben!”⁽²⁶⁾について後藤はゲーテの言葉の引用だというのが、この根拠となる出典についての記述ではない。

フレーベルはこの語句を自らの『人間の教育』から導きだしたのであるが、それはその部分の文脈から言って極めて自然な感じがする。「子どもから学ぼう。子ども生命のひそやかな忠告に、子どもの心のしずかな要求に、耳をかたむけよう。子どもに生きよう。（傍線筆者）そうすれば、子どもの生命が、われわれに平和と喜びをもたらしてくれるだろう。」⁽²⁷⁾との言葉である。このうち、一線の部分の独語が“Laßt uns unsern Kindern leben”なのであるから、フレーベル自身のもの以外には考えられない。

次に教師論が展開されるのであるが、「教師の資格」についてはおそらくランゲ版のフレーベル著作集（ジャーヴィスによる翻訳）から引用したものと考えられる。そこに含まれている「女子児童保育者ならびに女子教育者のための養成所案」の内容と大体同じだからである。後藤はここで教師の一般的資質をフレーベルの上記論文等によって展開するが、その際フレーベルは「両親を初め一般の世人を児童の教育者たらしめ様と⁽²⁸⁾と前置きしている。だがその後、「フ氏は幼児児童の教育は女性の天職であると信じ」「母性の威力」「高尚なる母性の本能」⁽²⁹⁾を主張していると述べる。後藤は一般男女の教師から、女性の教師を論じ始めるこの間の背景については深く言及していないが、ただ「幼稚園教育の宣伝その効少きを見るや従来⁽³⁰⁾の宣伝方針を変じて世の母性に対してこれを成さんと気付きたる誠に達見と⁽³⁰⁾いってよい」と称賛している。この間の事情については今日に至る研究成果で究明された点が多いが、ここではふれないでおく。ただこの母性論強調の脈絡において後藤は次のような例をあげている。彼は言う。朝鮮教化にあたって米国宣教師は先ず朝鮮婦人の教育に着手した。それは「『鼠の絶滅は先ず牡鼠狩りに在り』に相通

じたる所⁽³¹⁾がある、というのである。「牡鼠狩り」を幼児保育者に母性を養成することに連想するのは、もはやフレーベルを離れて後藤自身の感性からくるもの以外の何ものでもない。彼はその上、婦人、母は幼児の発達と「家門、国家の盛衰と密接不離の關係」にある故に⁽³²⁾、「余は我国教育発展の将来は是非女性殊に母に対して向はねばならぬ⁽³³⁾」と結んでいる。母性と国家の発展が直結して強調されている点に後藤のみならず、この時代のフレーベル受容の一面を見ることができよう。

さて教師論に続いては、「プレー」(遊戯)の教育作用である。遊戯論はすでに随所で登場させているが、ここではとくに遊戯の道徳的価値をあげている。それらは自制的精神、犠牲、服従、自信、独立独行などであるが、さらにいう。「青年の活気はこれを抑圧すると、鬱積して自然に無秩序的に爆発的形式を以って破裂⁽³⁴⁾し、学校暴動も起こしかねないと言う。それ故に「遊戯は学校に於ける青年児童の鬱勃たる活気⁽³⁵⁾を無難しかも有効に排泄せしめる一つ的手段と見ることができるとも述べている。もちろんこれは、さまざまな角度から遊戯について述べた中の一部であろう。が、『人間の教育』における遊戯の中心的意味は、共に喜び、自由・満足・安息を与え、人間が全体的に発達し、将来の全生活の源泉であるという主張にある。フレーベルが遊戯を暴力の防波堤の効用とまで考えていたかは疑わしい。

(3) フレーベル研究のまとめ

後藤の説には以上のような幾つかの疑点が見られるが、しかし全288頁に及ぶ浩瀚なこの『教育者としてのフレーベル研究』は、我国のフレーベル研究著作においてそれまで見ることができなかつた。当時、フレーベル教育をあらゆる角度から徹底的に究明した点で他に類をみない成果であった。アメリカ進歩主義実用主義教育学者、心理学者たちとその影響を受けた大正新教育期の倉橋たちが、抽象と象徴と形式を批判して退けたフレーベル教育哲学とその實際を、ここでは真正面に見据えている。彼らが「神秘的形而上学的方法」として捨象する恩物と恩物教育論に後藤はとりわけ熱意をもって解釈を試みている。反復の多い波解な宗教哲学的教育観に迫り、その内を貫く人間教育に真実を見出ししている。それは彼が教育現場の視点から系統的に研究し、實際教育に応用すること、フレーベルという埋れ木の掘り出しによって、教育発達の材料にし

⁽³⁶⁾たい、という強い問題意識から出発したことに因ると考えられる。

この著作の序を記した長田新はこの出版について、フレーベル・ルネサンス（復帰運動）を引き起す最初の烽火として期待している。というのも長田の目には、この時代は産業立国と不景気が実用主義を蔓延させ、人間の動物化と人間教育の受難の時代、と映っているからである。この時代にこそ断えず豊かな具体的内容を供給する泉としての古典教育学に立ち帰るべき、というのである。つまり長田にとっては、ペスタロッチやフレーベルは現代に魂を賦与する存在なのである。そしてフレーベルについてはとくに児童のうちに神性への顕現を見て感銘しているのだから、この長田に師事した後藤が彼のフレーベル観を受け継いでいるのは当然であろうと考える。

Ⅲ 小川正行のフレーベル受容

1) 小川の業績と使用ドイツ語文献

小川正行の『フレーベルの生涯及思想』（昭和7）は彼自身が述べるように、フレーベル生誕150周年に合わせて出版された。

小川は元来フレーベルの研究者とはいえない。彼は師範学校長やその付属小学校主事を歴任することで実践の立場から教育内容や方法の改善を図る一方で、教授学や西洋教育史学の究明に研鑽を積み、欧米の教育の実際を紹介してきた。教授学、教育方法学に関しては『最新教授学精義』（大正12）、『最近訓練原論』（昭和4）、『労作教育論及教授法』（昭和10）などがある。上記書にはすでに西洋の教育史学の成果や教育論が数多く引用されているのである。専ら歴史的にアプローチしたものとしては、佐藤熊治郎、篠原助市等と共著の『近世教育史』（明治43）があり、ここではフレーベルは幼稚園の創設者の位置づけがなされている。その後『ペスタロッチの生涯及思想』（大正8）を出版している。教育の実際論としては、『欧米対照小学校教育の実際』（大正5）をはじめ、大正12年から3ヵ年のドイツを中心にした欧米での研修後は、『独逸に於ける新教育』（昭和3）、『郷土の本質と郷土教育』（昭和6）や『家庭教育講和』（昭和7）なども著わした。これは『フレーベルの生涯及思想』と同時期に出版されているのでこの著作と関連が深い。その他、学校教育と経

営に関する数多くの論文や著作がある。

さて小川のこのフレーベルに関する著作は、前掲の後藤真造の研究にも増して、その生涯、著書、思想、学説の全般にわたる大部な研究成果である。なかでもフレーベルの生涯と事業の章部分が全体の半分を占め、新事実が当代随一のドイツのフレーベル研究者の業績をもとに叙述されている。

この著作にあたって参考にしたドイツ語文献リストについて見てみたい。

1. Hermann Pöshe, Friedrich Fröbels entwicklund-erziehende Menschenbildung 1862

ペシェはフレーベルと親交のあった人物で、1851年にすでにフレーベル教育学の体系化を試みている。この邦訳『フリードリヒ・フレーベルの人間教育』は1821年の「徹底的なドイツ的性格を十分に満足させる教育」から恩物教育論、そして1851年の「フレーベル運動誌」にいたるフレーベル文献を抜粋し、組織だてられた全体を提示することを試みた。小川はこれを文献中の「珍書であり、彼の国に於ても容易に得難き書⁽³⁷⁾」というが、ペシェは「フレーベル自身が死を乗り越えて、彼の包括的な体系⁽³⁸⁾」を書いたようなのだと述べている。

2. Friedrich Seidel, Friedrich Fröbels pädagogische Schriften 1883

この『フリードリヒ・フレーベル著作集』は全三巻から成り、第一巻は『人間の教育』と彼の伝記、第二巻『キンダーガルテン論』、第三巻『母の歌と愛撫の歌』と楽譜、である。ザイデルによって『人間の教育』は章節区分され、原典上の誤りも訂正されている。とくに第二巻は「日曜誌」「週刊誌」「運動誌」からの編集で、これはW.ランゲ編のフレーベル著作集にも匹敵されよう。しかし小川は「幼稚園教育の諸問題には深く触れるに至らなかった⁽³⁹⁾」と言っているので、ペシェとこのザイデルのフレーベル著作集からフレーベル自身の言葉をどれだけ吟味したかは分からない。

3. Johannes Schultz Die philosophische Grundlage der Pädagogik Friedrich Fröbels 1905

小川はフレーベルの哲学をこのシュルツの『フリードリヒ・フレーベ

ル教育学の哲学的基盤』に依拠したという。シュルツの論文の特徴はフレーベルの思想から、形而上学と心理学との関係、人間と自然の本性を神との関わりで論じている点などである。終章の「哲学観との関連から見たフレーベル教育学」については小川の「結語」に援用された部分が多い。

4. Johannes Prüfer, Die pädagogischen Bestrebungen Friedrich Fröbels in den Jahren 1836-1842 1909

『1836年-1842年におけるフリードリヒ・フレーベルの教育努力』はブリューファアの博士号取得の学位論文である。これはキンダーガルテンの構想について、フレーベルの手稿をもとにして研究しなおした結果、新しい事実を発表したものである。ここでは従来の考察への反論がなされている。小川の著作では、第四章「幼児教育事業の開拓」の項で、このブリューファアの研究成果が参考にされている。なお、このIIIの12では「フレーベルの女性の世界への完全な方向転換 (Hinwendung)」が明解に記されている。

5. Johannes Prüfer, Kleinkinderpädagogik 1913

これは近世史の中から幼児教育思想を探り、その理論的実践的内容を論述している。IIにおける初期の幼児保育施設の例示, Spielschule(遊戯学校), Kleinkinderbewahranstalt(幼児保育所), Krippe(託児所)は小川の著作に要約紹介されている。

6. Hans Zimmern, Fröbels kleinere Schriften zur Pädagogik 1914

この『フレーベル教育学小論文集』は二つのグループから構成されていて、第一はフレーベルのペスタロッチとの関係を背景とした資料である。ランゲ (W.Lange) もこれらを取り上げているが全文ではないこと、またペスタロッチに関連してはシュティーターヴィツ (Reinhard Stiebitz)の論文⁽⁴⁰⁾を参考にするよう薦めている。第2のグループはカイルハウ小論文と呼ばれているものである。これらは『人間の教育』よりもドイツ国民教育が色濃く表現されている。その7つの小論文を全て収集したのはこれが最初である。さらに「カイルハウ フレーベルの教育施設についての報告(C.ツェー)も掲載されている。ツインマーマンはそのままのまえがきで、この二冊によって「フレーベルを単なる児童教育者の古典

的代表者とみなす事がいかに間違いであるかが分かる筈⁽⁴¹⁾」であり、フレーベルは「現代社会における真の教育者だった⁽⁴²⁾」と述べている。カイルハウ小論文については小川は、第二編「フレーベルの著作及び論文」中に掲載している。

7. Johannes Prüfer, Friedrich Fröbel (Zweite Aufl.) 1920

これは1905年に出版された『フリードリヒ・フレーベル、その生涯と世界』が絶版となったので、第二版として出されたものである。ただ第8章の「スイスでの仕事」は新資料によって書き改められている。小川のフレーベル研究では、フレーベルの生涯と教育事業の部分はこのプリーファアの著作が底本となって進められている。

8. Henriette Goldschmidt, Bertha von Marenholz-Bülow 1896

これは副題に、「フリードリヒ・フレーベルの教育生命への奉仕に於ける彼女の生涯と業績」とあり、1849年のフレーベルとの出遇い以来、キンダーガルテン運動に献身するビューロー夫人の生涯を叙述したものである。小川は一連の「フレーベル学徒」を第一篇の第五章であげているが、このビューロー夫人についてはこの書から叙述したと考えられる。

9. Henny Schmacher, Friedrich Fröbels Idee in Lichte der Gegenwart 1923

シュマツヒヤアがこの『現代の光をあてたフリードリヒ・フレーベルの理念』を出版した1923年と言えば、ワイマール共和国が出帆した時期である。この著も新社会と新教育の理想に燃えて、フレーベルの世界的感性や人間協同体に焦点をあてた極めて現代的視点で眺められている。しかもこの著が「徹底的学校改革者」同盟の出版物である、『生活学校』の第13集として出版されているのである。彼女は「ペスタロッチ・フレーベルハウス」に長年勤務していたが、モンテッソリ教育についても研究している。ここではフレーベル理念のもつ欠点やその後継者による歪曲も述べられている。

10. Fritz Halfter, Der Junge Fröbel 1930

当代の新進気鋭のフレーベル研究者であり、この『青年フレーベル』の著者ハルフトアは1924年著の『フリードリヒ・フレーベル、その1782から1811年までの内的発達についての研究』を引き継いでいる。小川はフレーベルの幼少年、青年時代までを先のプリーファアとこのハルフ

ターの著によって記している。ハルプターはフレーベルの「天才的素質が次第に目覚めてゆく薄明りの領域」⁽⁴³⁾を探究せずに、フレーベルの思想は理解できないという視点からこれを書いている。

11. Fritz Halfter, Friedrich Fröbel, Der Werdegang eines Menschheitsziehung 1931

この著作は小川が執筆後に入手したので一部採録したが、「大著の余り詳密煩瑣すぎて利用出来なかったもの」であるという。

12. Alfred Schober, Friedrich Fröbel als Führer zur Gegenwartspädagogik 1925

これもフレーベルの著作集からの抜粋である。『人間の教育』や幼児教育の他、読み方、図画教育法などを取り上げている。長い編集者の序文では1900年代以来の新教育運動や、ケルシェンシュタイナーやガウディヒの共同社会に於ける労作教育や芸術教育の主張などについて述べ、それはすでにフレーベル教育学の根本、核心をなすものであると指摘する。それはこのフレーベル著作集のタイトルが『現代教育学の指導者としてのフリードリヒ・フレーベル』とあるように、ショーバーは現在から問題を提起している。現代の主知主義の学校を改革する実践はフレーベル教育学に結びついている、と彼は指摘するのである。

13. H. Courthope Bowen, Froebel and education by Self-Activity 1905

Bowen はロンドンの現場の教師兼校長時代を経てフレーベルの教育原理に出会う。その原理を研究して実践に応用したもの。そうした研究と実践の過程を経たフレーベルの生涯から、教育著作の記述と実践研究の成果の全般にわたって記述している。

2) 『フレーベルの生涯及思想』——幾つかの論点——

さて、『フレーベルの生涯及思想』の考察に入りたい。この小川の著書によって我国に初めてフレーベルに関する多数の事実関係が明らかにされた。だがここでは幾つかの論点のみを取り上げたい。

その第一はフレーベルが教師生活の出発に際して行ったペスタロッチ訪問についてである。小川は第一回の訪問でフレーベルがペスタロッチの人類愛と犠牲心に甚大な印象を得、自己の生命に高尚な価値を発見⁽⁴⁴⁾したという、肯定面について述べている。確かにここでのフレーベルの

感動と驚嘆は間違いない。この強烈な印象こそ数年後の第二回の訪問を実現させたものにつながっている。ところで、フレーベルの「マイニンゲン公への書簡」(自伝)を見ると、当時まだ未経験の彼がその教授法を仔細に吟味できなかつたことを告白しながらも、すでにその教授要目の不完全性と一面性、人間の調和的発達に必要な学科目が欠如していたこと、さらに、教授を「余りに積極的に与へ、また余りに機械的に習得」⁽⁴⁵⁾させている様子を感じとっているのである。したがって、小川の言う「今やこの第二回訪問に依り漸く厳正な批判的地位に立つ」⁽⁴⁶⁾たというのは正確ではない。

しかも小川がここでフレーベルの「厳正な批判」、として指摘するのはペスタロッチ教育学の原理が、「人間を絶対最高の存在に依って従属するもの」⁽⁴⁷⁾ではなく、宗教教育、幼児教育が等閑視されていることに重点を置いている。

ところが先の「マイニンゲン公への書簡」でのフレーベルの批判は、主に教材の有機的関連の欠如⁽⁴⁸⁾、「手段と目的との不統一」⁽⁴⁹⁾、「人間の本質若しくは学科の本質を満足」⁽⁵⁰⁾させることへの軽視についてである。だが小川は、これら教授法学については注目していない。フレーベルが教授の内的統一の必要性にこだわったからこそ、さらにそれを自然と人間において究明するべく大学生活に復帰したのである。小川が入手している資料のツィンマーマン著『教育に関する小論文集』には、「教育と授業に関するペスタロッチの基本命題の素描(ペスタロッチに則して)」がルードルシュタット侯妃への1回目の建白書の全文であり、また「マイニンゲン公への書簡」はツィンマーマンの前掲書中の「イフェルテンにおけるペスタロッチ訪問に関するフレーベル自身による証言(1827)」⁽⁵¹⁾に収められている。小川はランゲ編『フレーベル教育学全集』、あるいはシュテューヴィッツのペスタロッチとフレーベルとの関係を著した論文を参考文献に載せていない。それであればペスタロッチとの関係については上記のツィンマーマンのものにしか収録されていないのだから、これをつぶさに検討した結果が表わされていないのは当然である。

一方、第三篇で小川は「フレーベルの学説」を、思想や哲学からペスタロッチとフレーベルを比較している。前者が「経験から概念」⁽⁵²⁾を導く⁽⁵³⁾のに対して、後者が「概念から事実を演繹」⁽⁵³⁾する方法、との相違点をあ

げながらその教育哲学的背景を綿密に分析している。その際、神秘主義、浪漫主義との関連で「形而上学的自然哲学」、あるいは「理想主義の一元論」に支えられた「全体的生命発展教育⁽⁵⁴⁾」、とフレーベル教育学の思想を名づけ、様々な角度から分析しているのは注目に値いする。

すでにペスタロッチ教育学について小川は、自分の著作で存分に展開しているのであるが、なおプリューファーの説を引用して、ペスタロッチとフレーベルを比較している。それは両者とも自己活動を重視しているが、ペスタロッチは直観による認識から道徳的自律へ、フレーベルは創造、構成、活動衝動から認識へ、という相違もあげている。そして抑圧を排除し、快活な生活環境と自由活動を重んずるところにフレーベルの「近代的、新教育的理想⁽⁵⁵⁾」が存在する、と評価している。

さて、第二にキンダーガルテン（幼稚園）の構想について考察したい。小川はこの著作の主な対象をフレーベルの根本思想に置き、幼稚園の諸問題には深く触れなかったという。確かに全体構成において「幼児教育事業」の部分は少ない。この点だけをみてもこの著作はこれまでのフレーベル研究の傾向とは異質である。さて、キンダーガルテンの構想についてであるが、小川はフレーベルのペスタロッチ学園での教育体験が教育基礎としての幼児教育の価値を認識したこと、これがフレーベルが「他日幼稚園の教育思想を構成するに至った根源的見解⁽⁵⁶⁾」であるという。

だが、小川はフレーベルが明確にそれを表現しているのはブルグドルフ孤児院長時代だとする。1836年にはフレーベルは、「新しい全人的教育構想⁽⁵⁷⁾が湧然として噴出し、「人間性の本質を正しく認識した純潔な家庭生活関係こそ教育の根底であるとし、幼児の教育方法の研究に没頭する⁽⁵⁸⁾」ようになったとする。あわせて球、立方体などの遊具をこの前年から思索していたという。

そして直接彼がキンダーガルテン計画の実行を思い立ったのはベルリンに新設された孤児院や児童保育所などを視察した1836年の夏以降だとする。この視察によってフレーベルは自己の教育理想に程遠いこれらの施設に慨嘆した結果、新しい構想を考えついたと述べるのである。⁽⁵⁹⁾

その後、1837年1月には「自己教育の目的までの直観教授の研究所」（小川訳）（Eine Anstalt für Anschauungsunterricht zum Selbstunterrichte and zur Selbstbelehrung）を設けた。ここでは「精神が自己表現

に依って自覚に進むためには材料を必要とする⁽⁶⁰⁾」ということで、遊具の製作にとりかかった。これが恩物 (Gabe) と名づけられたものである。その後1837年6月、この研究所 (施設) を「児童少年の為の作業教養所 (Anstalt zur Kindheit und Jugend) に改称。許可を得て大体的に遊具の製作にとりかかるのだが、ここでは製作し販売した遊具の総量の一覧もあげている。この間彼の事業とその精神を紹介する日曜誌 (Sonntagsblatt) も発行している。小川はこれらの経過をプリューファーの『フリードリヒ・フレーベル』からその殆んどを翻訳しながら叙述している。

小川はキンダーガルテンの思想はフレーベルの平素の持論である家庭教育の改善のため、幼児教育上の新遊具の考察に進み、その製作中に漸次構想されて行った上記の過程を具体的事実を示しながら結論づけている。ここには当時のフレーベルのキンダーガルテン研究の最新の、しかも最も正確な成果が記されている。

次に小川はフレーベル時代に開設されていた幼児教育施設について、プリューファーの『幼児教育学』によって叙述している。ここでは遊戯学校 (Spielschule)、幼児保育所 (Kinderbewahranstalt)、託児所 (Krippe) など、すでにドイツで100カ所を越えるこうした施設がフレーベルキンダーガルテンの思想の先駆を形成したとする。だが、それらは外側からの救貧的、宗教的動機から起されたもので、フレーベルの内側からの哲学的心理学的思想からのキンダーガルテンとは区別している。

その後フレーベルはドレスデンなどで遊具の宣伝旅行を経て、1839年6月、「幼児教育指導者第一回講習科」を開設、のちこれを子どもの母 (Kindermutter) の講習科と呼ぶ。この訓練に設けられたのが遊戯作業所 (Spiel und Baschäftigungsanstalt) である。小川はここでとくに1836年から1838年頃までに開設された前掲の「研究所」や「教養所」をキンダーガルテンの前身だろうと誤認した者が多かったと指摘している。この叙述については小川も言うようにプリューファーが多数の文献から当時確認したもので、それらは「⁽⁶¹⁾実に彼の考案にかかる遊具を考察し発売する事務室の名称に過ぎなかった」(傍点小川) という。当時確認した結果をプリューファーは『幼児教育学』に詳細に論じている。モルフ、シュミット、ペーメ、ハンシュマンのような当時の代表的なフレーベル研究者の著作をあげて誤認を指摘してさえている。⁽⁶²⁾ ちなみに先の後藤はこれ

らの施設 (Anstalt) が存在したことさえ記していない。ただ彼は「幼稚園は前節カイルハウ、ブルグドルフの学舎をプランケンブルグに於て復興し延長したものである⁽⁶³⁾」と述べているのみである。これらを考え合わせるとプリューフアーの研究成果とはいえ、ドイツの最新の研究成果を受容し、我国で最初に詳細に発表した小川の功績は高く評価されなければなるまい。それぞれ異なる役割を果たしていた施設を統合して、1840年6月、一般ドイツキンダーガルテン (Allgemeine Deutsche Kindergarten) の創立式典の挙行は今日では広く確認されているが、当時は一般に別の定説が通っていたわけである。なお小川はふれていないが、ガルテン=庭 (Garten) の理念については、すでにフランクフルト、ゲッチェンゲン時代に、さらに『人間の教育』の中にも「神の庭」⁽⁶⁴⁾として発想されているのは見のがしてはならない。

第三には幼稚園禁止令 (Kindergartenverbot) の真因についてである。これについて小川は、前掲のH.シュマッヒャー、F.ハルプター、J.プリューフアーの著作がとり上げている。プリューフアーの著作『フリードリヒ・フレーベル』は、1851年8月の内務・文部両大臣によって発せられたこの禁止令の全文⁽⁶⁵⁾、その後地方新聞にフレーベルが発表した「弁明書」⁽⁶⁶⁾、同年10月のリーベンシュタインの教育者大会において採択されたフレーベルの教育説を支持する「声明書」⁽⁶⁷⁾を載せている。

この禁止令の真因について小川は、シュマッヒャーの論文によって解釈を試みている。彼女は、フレーベルの理念は人間を一つの全体と見、同時に家族、国民、人類、社会の一員であること、すなわち、人間は共同社会的成員 (Gemeinschaftsglied) であり、人類の成員 (Glied der Menschheit) でもあるという。それは超国民的・人類的理念ともいえるべきもので、階級的宗派的差別はありえず、自由自立の方向性を示していた。それ故に政府からは国家の転覆を企てる社会主義者としてフレーベルは危険視されたのだろう、と述べている。小川はこの論をさらに具体的に検証するためにハルプターやプリューフアーの論を駆使し、次のように結論づけている。

「過激思想を抑圧しなければならぬとして居た際、この新設の教育機関が急進主義の社会民主党系の共鳴を得たのに脅威を感じ、幼稚園そのものが社会不安の根源とならんことを恐れ、機逸すべからずとして双葉

の間に之を驅除し、併せて急進思想に弾圧を加へたのである。それであるから幼稚園そのものの創立者がカール・フレーベルであろうとフリードリッヒ・フレーベルであろうとそれは問題ではなかつた⁽⁶⁹⁾ (傍点小川)。

少し引用文が長くなつたが、禁止令に対するこの論こそ、当時新進鋭のドイツ人研究者の成果であり、小川はそれを彼自身の方法で表現した我国初の研究者であつたといふことができる。ちなみにこれを後藤の記述と比較してみたい。後藤は当時社会主義者と見られていた甥のカール・フレーベルと同様にフリードリヒ・フレーベルも「連類者と目せられたのでそれ等が発令の原因⁽⁷⁰⁾」であると言ひ、フレーベルの「教育事業は当時猶その精神が世人に理解されないために幾多の誤解を受けて居た⁽⁷¹⁾」としている。彼はもっぱらそれまで一般的に解されていた誤解説をとっている。一方小川は、誤解などありえない、といふところから論を進めているのである。確かに単なる誤解なら、その後10年間も禁止され続けるなどといふことはありえなかつただろう。

さて最後に、フレーベル教育思想についての小川の「結語」をみてみたい。要するに小川はフレーベル教育学は浪漫主義の同一哲学を出発点とするので、自然と人間に、感覚、衝動、感情と理性や意志も同一の法則に従うとする。この必然の法則に従うので「自由も強制もない⁽⁷²⁾」。ところが各人には運命とか遺伝とかがあり、内心理性ととの矛盾、争闘不安を免れない。これらを見捨てた万有在神論の確信者たるフレーベルは「独断的楽天主思想⁽⁷³⁾」家なのだといふ。小川はここでフレーベルをルソーもろとも自然即善の独断説の誤解者であると述べるのである。

だがルソーは、時代の絶対主義体制のアンチ・テーゼとして自然権の思想を立てた。そして「自然即善」、天賦人権の思想体系を導き出している。一方フレーベルは、時代の宗教哲学をバックボーンとし、宇宙を有機的全体と見てその万物に働く永遠の法則を自由に自己活動的に意識する人間の形成を提唱した。確かにフレーベルはその確信の強固さ故に独断や誤認もまぬがれない思想的傾向をもっている。小川も指摘するように、「人は皆自己の愛好するところに偏するを免れない⁽⁷⁴⁾」のであるが、可能な限り、それを論証しうるものでなければなるまい。この点、生命合一思想は明白な論理の一環した思想であり、フレーベルはこの思想と信

念のためにはあらゆる中傷や弾圧にも屈さず、教育事業と実践を創造しあげた。それは誤謬と言うよりも、ある思想体系をなすものであり、それが小川には受容できないというのに過ぎないのである。

ところで小川は、フレーベルの宗教的、思想的信念そのものよりも、そこを出発点とした自己活動に評価を与えている。ペスタロッチの直観教授よりも、環境、対象を全体として把え、児童の観喜によって生ずる構成・表現の活動は実際生活に適合していると評価する。しかもその教育は最近の合科教授、郷土教育、体験教育、芸術教育、作業教育、行動学校、生活教育らの先駆的教育思想であるともいっている。この点小川の見解はショーバーの、現代学校教育を改革指導するフレーベル教育学、と促える見解と一致している。

小川はこの『フレーベルの生涯及思想』の前年に『郷土の本質と郷土教育』を、その翌年には『家庭教育講和』を出版した。これらの教育論には小川が重視するフレーベル思想が血流となって注ぎ込まれている。

IV その後の業績——まとめとして——

上記のようにフレーベル生誕150周年の前後に、国内外でフレーベルの生涯と教育事業、教育思想の全容にわたる研究が進んだ。我国では後藤真造や小川正行が優れた業績をあげたといえる。その後空本和助が『フレーベルの生涯』(昭和8)を著したが、これは我国に於けるフレーベル研究の成果をふまえて丹念にその生涯を綴ったものである。

空本は、フレーベルのペスタロッチ教授法への批判には、フレーベルの後の大学での研究やカイルハウでの教育実践による「深き思索」⁽⁷⁵⁾の結果であると指摘している。フレーベルがペスタロッチ訪問中、あるいは直後に抱いたペスタロッチ教育法の印象と、のちに熟成されて提出されたものとを空本は区別して考えているのである。一方、空本はカイルハウ学園の衰微、及び幼稚園禁止令の真の理由については多少曖昧な表現をしている。フレーベルの思想が自由主義、社会主義と見做されやすく、そのように受けとられやすいものであったことが疑惑や弾圧の理由を招いたというのである。この着眼点は空本の時代考察の視点と深く関わっている。また、フレーベルの誕生期の母子関係から発する「悲痛な叫び」⁽¹⁶⁾

がフレーベルの幼児教育を考える内的動機とする叙述も、先の後藤同様に短絡的である。

ともあれ、フレーベルの人間像を物語風に描写した点では、フレーベルについての教育現場への啓蒙的役割を果たしたであろうと推測する。

またこの年、茅野蕭々^{ちのしょうしやう} 訳で『母の歌と愛撫の歌』が出版された。プリューファー編のこの著は、ハウが明治30年に最初に翻訳したものである。これはドイツ文学者の茅野がドイツ語版から日本語に訳出し、ウンケルの浪漫主義的手法の原画を初めて再録している。

『幼児の教育』にはアデーレ・メッナー⁽⁷⁷⁾ 著、白根孝之訳の「ドイツに於ける就学前の教育の発展に就いて」が載せられている。ここではキンダーガルテンと様々な教育と保護の幼児保護施設、さらに「ペスタロッチ・フレーベルハウス」も紹介されている。齊藤善太郎はこの期、二つの論考をこれに載せたが、その一つは「フレーベルを想ふ」——宗教々育に関し更めて⁽⁷⁸⁾と、「如何にして宗教に導いたらよいで⁽⁷⁹⁾であろうか—シュライエルマツヘル、フレーベルの教を想ひだしながら—である。前者はフレーベルの『人間の教育』の一部を自ら翻訳したものである。齊藤のは確かに原文に近いニュアンスを醸し出している。ここではヘーゲルの「精神」= Geist を含めて時代精神の理解の必要性を説いているのも注目される。後者の論文はキリスト教学校の一教師として、フレーベルの「全宇宙との生の共同」から宗教々育⁽⁸⁰⁾を考察しているものである⁽⁸¹⁾。

大塚喜一は「フレーベル祭の前後に」、⁽⁸⁰⁾「フレーベルに学ぶ」⁽⁸¹⁾を連続して『幼児の教育』誌上に執筆している。彼は前者でツインマーマン編の『フレーベルの人間教育』のうちの42節を全訳しながら、実習前の学生たちに「精神上の母たること」を呼びかける。後者はヴィルヘルミーネ夫人の功績を称えたものである。その他同誌に、岩村清四郎が、「基督教主義の保育」について、ルソーやフレーベルの神性観を引き合いに述べている。

さて、1934(昭和9)年といえば、和田真の『実験保育学』が出版された年である。倉橋惣三と並んで我国の幼児保育学の進歩に貢献した彼は、幼児教育学の科学化を追究とした学者である。彼は言う。「幼児教育は真正なる科学的教育学の理法により演繹せらるゝところの方法に困⁽⁸²⁾って其学際的方案を発見させること」なのである、と。その際彼はあえて、

幼児自身の自己活動を根本とする主張においてフレーベル教育論に離反するものではないとも述べている。その後幼児教育の体系化、科学化は、城戸幡太郎の方法を産み出していくが、その立場は「児童問題研究会」の発足とともに明確になり、1933(昭和7)年7月には、「児童問題研究」が発刊された。

これらの流れを総括的に眺めると、昭和初期というこの短期間に極めて精力的にフレーベルの受容、研究、導入が行われたといえるだろう。それらの特徴を網羅して以下にまとめてみたい。

その第一は、フレーベル生誕150周年を契機として、実践現場と学際的研究の双方が、あるいはその両者の結合によってフレーベルの究明がこれまでになく多量に進められたことである。この期フレーベル研究者はフレーベルの地訪問で、その生涯を実感し、当地の研究者との交流で広範な資料を入手している。この期の成果はそうしたドイツからの直接のフレーベルの著作集、あるいは最先端の研究成果を受容し、これらを駆使してのフレーベル研究である。しかもこの期、大小のフレーベル著作の翻訳出版も行われている。もってフレーベルの生涯と教育事業、教育の実際、その宗教哲学を背景にした教育論等の全容がかつてなく詳細に、その上正確に究明されている。

第二には、大正新教育期のフレーベル受容との関りである。倉橋惣三はアメリカの進歩主義とプラグマテックな教育学や心理学の影響を深く受けて、これまでの形式的な恩物教育法を自らの幼稚園から排除した。一方、フレーベルの象徴主義や象徴的な生命合一思想を批判し、家庭教育を中心に据えた自由主義的な生活教育論を展開する。この新教育を教育現場に持ち込んだことで、形骸化した保育方法に活気をもたらした。同時にフレーベルの教育を生活や自由な労作や遊戯を中心にして新しい解釈をし、それを「真諦」⁽⁸³⁾と主張したのである。

ところが後藤真造や小川正行においては、渋解で、不透明な、反復の多い、しかしまさに時代の宗教哲学から導き出されたフレーベルの教育理念を可能な限り、フレーベルに則して忠実に受容し、表現することに徹して労力をかけている。

第三には、それにもかかわらず、万有在神論と生命合一の思想で全てを説明するフレーベルの一途さにはかならずしも同調せず、小川は何よ

りも彼の自己活動を第一に評価してた。その創造、活動、実践に人間発達の原因を見出す点でフレーベルに強く共感している。そういう意味から言えば、宗教者、非宗教者の別なくこの期のフレーベル研究者には大正新教育思想の痕跡を見出すことができる。

ともあれ、1935（昭和10）年以降は総力戦に向って教化総動員体制に突入していく時代に入り込む。それは美濃部達吉の天皇機関説への大々的な批判キャンペーンと「国体明徴」派の勝利、「肇国の精神」などが大正デモクラシー期の自由主義思想の残滓を一掃する時代である。しかもその少し前の、1930（昭和5）年には大正新教育のリーダーたちによって「新教育協会」が設立されたのだが、彼らの教育は次第に国家主義教育に唱和していくのである。

小川正行でさえ、『現下の教育問題』（昭和13）において「未曾有の転換期」にあたって、実際生活から遊離した概念生活を戒めた。その一方で、ナチス教育について、「復興独逸国民の教育的信念の如何に真摯であり、熱烈であるかを説明するもので、必ずや我が教育社会の参考とするに足るものがあるのを信ずるのである」と確信⁽⁸⁴⁾している。果して彼の「予言」通りに日本の教育はファシズム化の一途をたどっていくのである。

〔注〕

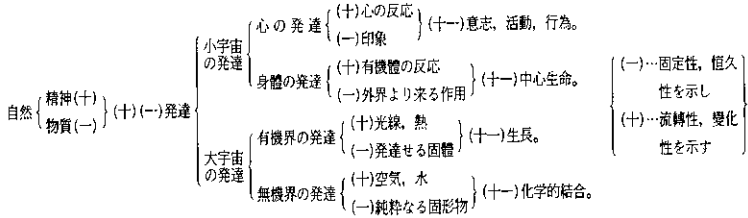
問題の視点

- (1) 浦田まり子「明治期の幼稚園教育におけるフレーベル思想の受容」(東京女子大学『論集』第27巻(1号)1976)、宍戸健夫「明治初期における外国からの幼児保育思想の導入についての一考察」(『愛知県立大学文学部論集』第33号昭和58年)、湯川嘉津美「明治初期におけるフレーベル主義教育の受容」(『幼児教育研究1987年版』)、拙稿(『大正新教育』期のFröbel受容)(『北星論集』第2号1990)など。
- (2) 日本保育学会『日本幼児保育史』第四巻 昭和46年 P43
- (3) 同上 P86
- (4) 同上 P33
- (5) 水野浩「保育者の歩み(3) A.L.ハウ」復刻『幼児の教育』第50巻4号 昭和50年 P51
- (6) 同上 P52
- (7) 同上 P46

- (8) 小林正金「頌栄幼稚園の二時間」『幼児の教育』第27巻7号 昭和2年 P31~37
- (9) 倉橋惣三「ハウ女史」前掲『幼児の教育』第29巻11号 昭和4年 P35
- (10) 田制佐重訳 「人間の教育」1925(昭2), 小原国芳訳『人の教育』1929(昭4)
- (11) 倉橋惣三 「フレーベル誕生百五十年」『幼児の教育』第32巻4号 昭和7年 P11
- (12) 日本幼児教育連盟 「本会主催フレーベル誕生百年記念講演会」『幼児の教育』第32巻5号 昭和7年 P11
- (13) 後藤真造『教育者としてのフレーベル研究』1930(昭和5) P3
- (14) 同上 P12
- (15) 後藤の引用文献中、本論考中掲載以外の英文文献は以下のようである。

Autobiography of Friedrich Froebel ——translated by E.Michoelis and H.K.Moore The Education of Man ——translated by W.N. Hailman Froebel's Education by Development ——translated by J. Jarvis Froebel's Education Laws for all Teachers ——by J.L. Hughes The Education Ideas of Froebel ——by J.White Froebel as a Pioneer in Modern Psychology ——by E.R.Murray The Principles of Education ——by Henderson.

- (16) 後藤真造 前掲書所収 福島正雄「跡文」P1
- (17) 同上 P6
- (18) フレーベル, 長田新訳『フレーベル自伝』1965(昭和40) P14 なおこのフレーベルの言葉は, 1827年に彼がマイニンゲン公へ宛てた書簡中にある。小原国芳, 荳司雅子監修『フレーベル全集』末巻, 1977(昭和52)にも収録されている。
- (19) 後藤真造 前掲書 P111~115
- (20) 同上 P130
- (21) 同上 P141



「これは一八九四年フ氏がハンブルグに於て教育宣傳の一節をハイ
ルマン氏が引用したものである」と後藤は説明している。

- (22) 同上 P144
- (23) 同上 P145
- (24) 同上 P147～148
- (25) 同上 P 8
- (26) 同上 P157～158
- (27) フレーベル, 岩崎次男訳『人間の教育 1』1960(昭35) P84
- (28)(29) 後藤真造 前掲書 P190
- (30)(31) 同上 P193
- (32) 同上 P192
- (33) 同上 P193
- (34)(35) 同上 P201
- (36) 同上 P288
- (37) 小川正行『フレーベルの生涯及思想』1932(昭和7) P5
- (38) H.Pösche, Friedrich Fröbels entwickelnd-erziehende Menschen-
bildung 1862
- (39) 小川正行 前掲書 P7
- (40) Reinhard Stiebitz, Friedrich Fröbels Beziehung zu Pestalozzi in
den Jahren 1805 bis 1810 und ihre Wirkungen auf seine Pädagogik
1930
- (41)(42) H.Zimmermann, Fröbels Kleinere Schriften zur Pädagogik
1914 S8
- (43) Fritz Halfler, Der Junge Fröbel 1930 S8 ここではハルプターは
「フレーベルの生命の統一の学問が栄えるためには、フレーベル自身
の生命の統一が持つ生(涯)の流れを赤裸々な事実を通して読者に認
識させ、その事実によって読者を確信に至らせなければならない」と
記している。

- (44) 小川正行 前掲書 P33
- (45) フレーベル, 長田新訳 前掲書 P78
- (46) 小川正行 前掲書 P50
- (47) 同上 P40
- (48) フレーベル, 長田新訳 前掲書 P99
- (49) 同上 P112
- (50) 同上 P113
- (51) Wichard Lange, Friedrich Fröbels gesammelte Schriften, Bd, I, II, III
- (52)(53) 小川正行 前掲書 P189
- (54) 同上の第三篇「フレーベルの学説」の中で, フレーベルの形而上学として宇宙論, 自然哲学, 倫理学, 心理学から分析している。その結果として小川は, 「全体的生命発展の教育」と名づけている。P253-262
- (55) 同上 P286
- (56) 同上 P78
- (57) 同上 P92
- (58) 同上 P93
- (59) 同上 P98 この点については W.ランゲ編のフレーベル著作集の中でパロップの報告を載せているが, そこで彼は「フリードリヒ・フレーベルがベルリンから帰った時には, 幼児の世話をする施設という理念はすでに完全に彼の心の中に出来上がっていた」と証言している。小原, 荘司監修『フレーベル全集』第一巻 1977 (昭52) P32
- (60) 同上 P95
- (61) 同上 P112 なおこの小川の文中二番目の「考案」は「製作」の誤りと考えられる。
- (62) J.Prüfer, Kleinkinderpädagogik 1913, S112-113
- (63) 後藤真造 前掲書 P69
- (64) フレーベル, 岩崎訳 前掲書 P42
- (65) J.Prüfer, Friedrich Fröbel S109
- (66) ditto S110
- (67) ditto S111
- (68) H.Schmacher, Friedrich Fröbels Idee in Lichte der Gegenwart 1923 S8
- (69) 小川正行 前掲書 P148 なおこれについては, プリューフアーの“Friedrich Fröbel”では, S118-119に載っている。

- (70)(71) 後藤真造 前掲書 P100
- (72) 小川正行 前掲書 P361
- (73) 同上 P362
- (74) 同上 P360
- (75) 空本和助『フレーベルの生涯』1933(昭和8) P33
- (76) これはカイルハウ学園については、同上書 P55, 幼稚園禁止令は P83
にある。
- (77) 『幼児の教育』第33巻5号 1933(昭和8)
- (78) 同上 第34巻6号 1934(昭和9)
- (79) 同上 第34巻10号 1934(昭和9)
- (80) 同上 第34巻5号 1934(昭和9)
- (81) 同上 第34巻8号 1934(昭和9)
- (82) 和田真の『実験保育学』1934(昭和9) P13
- (83) 倉橋惣三は『幼児の保育』において、伝統的なフレーベル主義を批判した論文を数多く掲載した。1912(明治45)年「フレーベル主義新釈」など。1934(昭和9)年には著書『幼稚園教育法真諦』を出版した。
- (84) 小川正行『現下の教育問題』1938(昭和13) P2 小川はこの著作でヒトラーを賞讃している。P126

The Reception of the Pedagogy of F. Fröbel in Early Showa Era

Reiko SAKAI

If we look through the history of the reception of Fröbel pedagogy in Japan, it is undoubting that it has been closely related to the situation and issues on education of each period. In the Meiji era the methods of Fröbel on kindergarten education were mainly introduced. Then in the Taisho era formalistic and symbolic styles of education were criticized by the stream of progressivism, and his theories of spontaneousness (Prinzip der Spontanität) and life-centered education (Lebenserziehung) were considered important and received.

The argument in this paper is developed with the following points :

1. Fröbel education in practice in early Showa.
2. "A Study of Fröbel as an educator" by Shinzo Goto. This explicates the thoughts of Fröbel on education and how they are practiced, by studying literatures in English.
3. The reception of Fröbel pedagogy by Masayuki Ogawa. This gives the entire picture of the life of Fröbel, his educational activities, writings and doctrines.

By considering these points above, it came clear that the studies of Fröbel in early Showa was done both by educators and scholars since the sesquicentennial of his nativity as its turning point. It outgrew the partial reception of Fröbel pedagogy in Meiji and Taisho, and efforts were made to bring the whole of his pedagogy, which has the religious philosophy based on the German romanticism as its backbone, to light. Various concrete facts as how kindergarten has been formed were also made clear through the most recent works on Fröbel in Germany. However, there still remains many spheres for Japanese scholars to analyze and enunciate

the pedagogy of Fröbel.